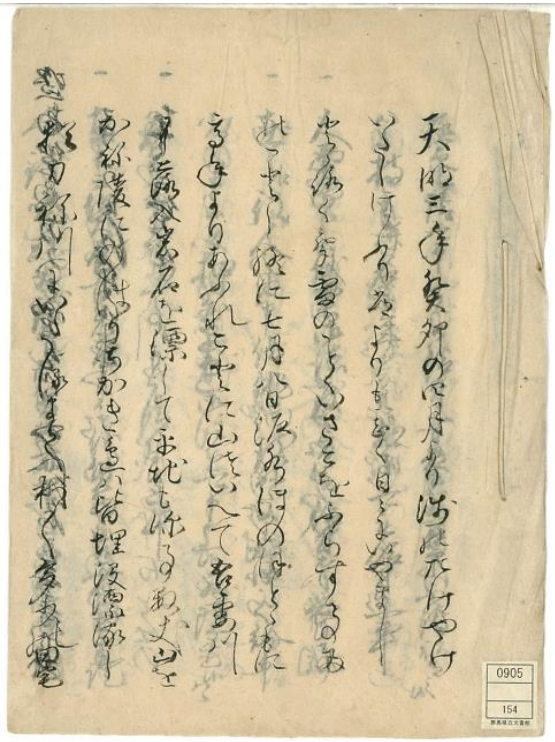

⑳〔浅間山焼崩供養塔石碑銘〕

年次不詳（近世）

吾妻郡東吾妻町原町の善導寺（浄土宗）の門前に建つ天明８年（1788）建立の供養塔裏面に刻まれた銘文の写と思われます。文字が苦手な者でも読むことができるように、かな書きで難解な表現を避けたことが書かれています。天明の浅間焼けという激甚災害の犠牲者を「供養」することが、災害の経験を忘れずに多くの人々に「語り継ぐ」ことにつながるという、被災地の建立者たちの強い願いが、この銘文からは感じられます。

富澤久幸家文書　P0905　No.154

【史料⑳】〔浅間山焼崩供養塔石碑銘〕年未詳

〔釈文〕

天明三年癸卯の四月より浅（間）のたけやけ
いたし、けふり常よりも甚く、日々にいやまし
とゝろく声雷のことく、いさこをふらす事雨
のことし、終に七月八日泥水、ほのほとともに
高ねよりあふれ、ことに山ついへて吾妻川
に落入、岩石を漂して平地も深事数丈山を
かね、陵にのぼり、ちかき辺ハ皆埋没・漂流し、
猶刀祢川にいたるまて村〳〵多少の田宅
を失ふ、凡此災にかかりて死るもの千を
もて数ふへし、人々たゝいさこのふる事
をおそれて川には心つかす、百とせの
いのち忽水の泡ときへしことふかく
あわれミいたむに堪たり、此時からうし
て恙なき者も父子相失ひ夫婦相
わかれて悲嘆の声野にミち、家をうつ
み、寶を流してハ、こゝへたりとさけひ
うえたりとよはふ、然るに
国家のおん仁恵難を水火のうちに救賜て
各安堵の思をなしぬ、今亡魂のために
弥陀の尊号を石に彫りて造立し、其陰
をかりておほむねを記す、これ唯児女
山賤もよミやすきを本意とするかゆへ
に俚言かな書にしてこと葉のあやある
事を用す、見る人おの〳〵一遍の仏号を
唱る事を得ハ希は無上菩提の一因縁
ならむかし
浅間山焼崩供養塔名

（P0905富澤久幸家文書No.154）